

投稿

秋吉利雄氏保存資料

1941年（昭和16）の皆既日食

～東北帝国大学 松隈健彦教授と海軍～

吉田 陽一（神戸市立浜山小学校）

1. はじめに

私は、2018年から「中村鏡とクック 25 cm 望遠鏡」[1]というブログを公開しています。1934年ローソップ島皆既日食の記事[2]を掲載したところ、祖父がこの日食観測隊員だったという方からコメントをいただきました。その隊員は、日食観測隊の責任者であった、水路部・秋吉利雄海軍少将（図1）でした。

それ以後、秋吉利雄氏のお孫様との交流が続き、秋吉利雄氏が保存した貴重な資料の数々を共有させていただくようになりました。その中には、戦時中の天文学者と海軍との密接な関係が分かる資料が多数含まれていました。（以下敬称略）



図1 秋吉利雄海軍少将（1944年撮影）[3]

2. 秋吉利雄と水路部

秋吉利雄（1892～1947）は、海軍兵学校・海軍大学校を経て水路部に入部しました。その後、海軍からの派遣学生として東京帝国大学天文学科に入学しました。卒業後は水路部第2部長として、日本独自の「天体位置表」の刊行に尽力しました[4]。秋吉利雄は、作家の池澤夏樹の大伯父にあたります。小説「ま

た会う日まで」[5]には、秋吉利雄の生涯が詳細に描かれています。

水路部は水路の測量、海図の製作、水路誌の編纂、気象や海象の観測など、航海の保安に関することを担った海軍の組織でした。1945年11月、海軍省の解体と共に水路事業は運輸省に移管され運輸省水路部となり、海上保安庁発足と同時に同庁へ移管されました[6]。

3. 1941年（昭和16）の皆既日食

1941年9月21日、中国大陸・台湾・石垣島・小笠原諸島を皆既帯が通る皆既日食がありました。石垣島では、皆既継続時間が3分に及びました。日本国内でも12:30～15:00にかけて、食分0.4～0.75の部分日食が見られました。各研究機関は、中国大陸・台湾・石垣島への皆既日食観測計画を立てました[7]。

日中戦争の最中であり、太平洋戦争開戦間際であったため、中国大陸やその周辺への皆既日食観測には、海軍の許可が必要でした。各研究機関は、観測計画書を次々に海軍に提出しました。海軍の窓口になったのが、水路部の秋吉利雄でした。

4. 東北帝国大学 松隈健彦

1934年9月、東北帝国大学（以下東北帝大）に天文学講座が設置されました[8]。東北帝大理学部天文学教室教授に昇任した松隈健彦（1890～1950）（図2）は、1941年皆既日食観測に際し、海軍に対して全面的な協力と便宜の供与を求めました。

松隈は、1914年から1917年まで、海軍兵

学校の教官でした[9]。そのため、海軍に要望を通しやすい立場にありました。



図2 東北帝大 松隈健彦教授[8]

5. 東北帝大皆既日食観測計画書

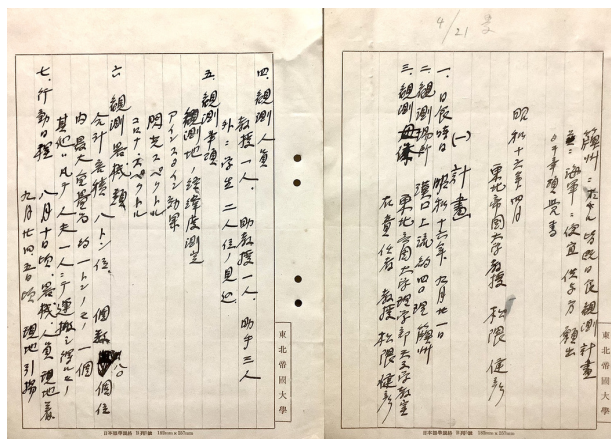


図3 東北帝大皆既日食観測計画書(1.1)[3]

図3~5は、松隈が水路部に提出した、皆既日食観測計画書[3]です。

「籐（はい）州に於ける皆既日食観測計画並に海軍に便宜供与方願出たき事項覚書

昭和16年4月 東北帝国大学教授 松隈健彦

(1) 計画

- 1.日食時日 昭和16年9月21日
- 2.観測場所 漢口上流約40浬 籐州
- 3.観測母体 東北帝国大学理学部天文学教室
右責任者 教授 松隈健彦
- 4.観測人員 教授1人、助教授1人、助手3人 他に学生2人位の見込

5.観測事項 観測地の経緯度測定 アインスタイン効果 閃光スペクトル コロナスペクトル

6.観測器械類 合計容積 8トン位 個数 80個位 内最大重量品 約1トンのもの1個
その他は凡て人夫1人にて運搬し得るもの

7.行動日程 8月10日頃 器械、人員 現地着 9月24、5日頃 現地引揚

1浬（かいり）は1852m、40浬は約74kmになります。

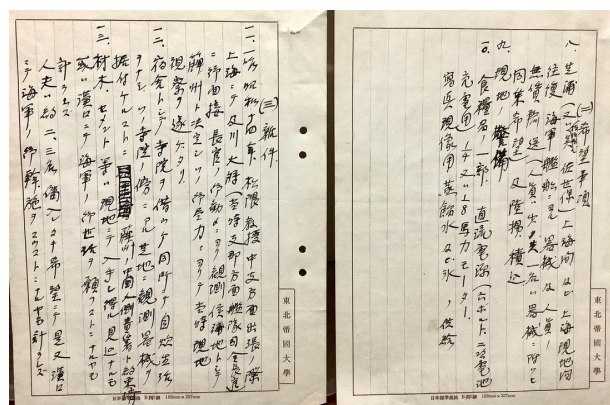


図4 東北帝大皆既日食観測計画書(1.2)[3]

「(2)希望事項

8.芝浦（又は横須賀、呉、佐世保）上海間 及上海現地間往復 海軍艦船に依る 器械及人員の無賃輸送（人員は少なく共1名は器械に付添い同乗希望）及 陸揚 積込

9.現地の警備

10. 食料品の一部、直流電源（6ボルト、2次電池充電用） 1/4又は1/8馬力モーター 写真現像用蒸留水 及 氷の供与

(3)雑件

11.昨昭和14年 松隈教授 中支方面出張の際 上海にて及川大將（当時支那方面艦隊司令長官）に御面接 長官のお勧めにより 観測候補地として籐州と決定し そのご尽力によりて 当時現地視察を遂げたり

12.宿舎として寺院を借り受け 同所にて自炊生活をなし その寺院の傍らにある芝地に 観測器械を据え付けることに籐州の中国人責

任者と約束済

13.材木セメント等は 現地にて入手し得る見込みなるも 或いは漢口にて 海軍の御世話を願うことになるやも計られず 人夫は約2,3名雇い入れたき希望にて 是又 漢口にて海軍の御斡旋を乞うことになるやも計られず」

松隈は 1939 年に中支方面で、海軍大将及川古志郎（当時支那方面艦隊司令長官）と面談していたこと、また、海軍からの全面的な協力が得られる観測地として、湖北省嘉魚縣簾州を及川自身から勧められていたことが書かれています。その他、宿舎や食料、観測場所、人夫の雇い入れ、木材やセメント等の資材調達についても便宜を求めていたことも分かります。

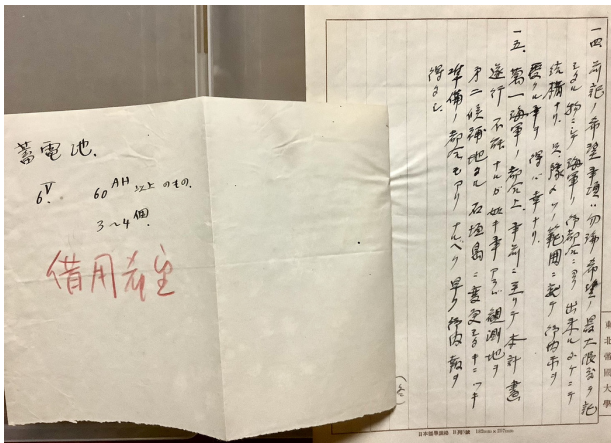


図5 東北帝大皆既日食観測計画書(1.3) [3]

「14.前記の希望事項は 勿論希望の最大限度を記したるものにして 海軍の御都合により 出来るだけにて結構なり 只あらかじめその範囲に就て御内示を受くる事を得ば幸いなり

15.萬一海軍の都合上 事前に至りて 本計画遂行不能なるが如き事あらば 観測地を第2候補地たる石垣島に変更したきにつき準備の都合もあり なるべく早く御内報を得たし(終)」

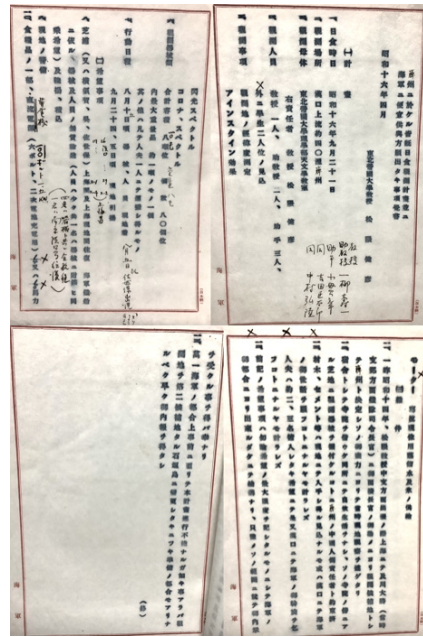


図6 水路部が東北帝大皆既日食観測計画書を清書したものの控え [3]

水路部では、提出された皆既日食観測計画書を清書し、その控えに追記や訂正を記入しました。

「助教授 一柳壽一 助手 小貫章 同吉田正太郎 同 中村弘陸 ×他に学生2人位の見込

6. 観測器械類 合計容積 8トン→10トン 重量8トン

7. 行動日程 8月10日→5 8月5日に佐世保出港(おそくならぬこと 26漢口・・・29 ×-2 27・・・×-1 ×-4) 上海着

(2) 希望事項

8. (4名は器械と共に会社船 1名は南京漢口間往復)

10. 直流電源→発電機 100V 1.5kw ×1/4 ×1/8 ×モーター 12.× 13.×」

6. 松隈の手紙と秋吉の返信

東北帝大の皆既日食観測計画書に添えて、松隈から水路部の秋吉へ手紙が送られました。それ以後も、松隈は多数の手紙を秋吉に送り続けました。

6.1 1941年4月19日松隈から秋吉へ

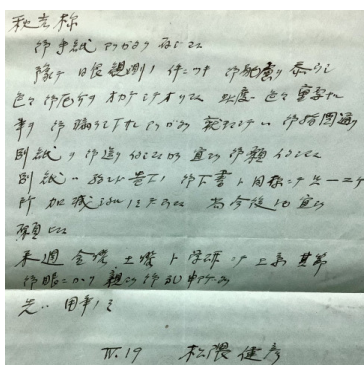


図7 松隈の1941年4月19日の手紙[3]

「秋吉様 お手紙ありがたく存じます さて日食観測の件につき ご配慮を忝うし色々ご厄介をおかけしております この度は色々重要なことをお願い下されありがたく つきましては御指図通り別紙をお送りいたしますから 宜しくお願いいたします 別紙に就いては 貴下のお下書きと同様にて 只 1,2ヶ所加減したるのみであります 尚今後とも宜しく申し上げます 来週金曜土曜と学研にて上京その節御目にかかり親しく御礼申し上げたく 先（まず）は 用事のみ 4月19日 松隈健彦」

松隈の手紙の内容から、秋吉が計画書の書式（下書き）を示し、その後、松隈が計画書（図3~5）を作成したことが分かります。

6.2 1941年6月4日松隈から秋吉へ

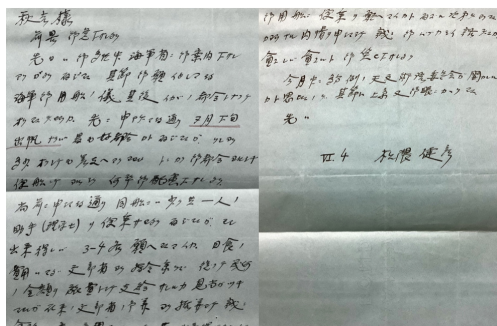


図8 松隈の1941年6月4日の手紙[3]

「秋吉様 前略ご免下されたく 先日はご多忙中海軍省にご案内下されありがたく存じま

す その節お願いいたしました海軍御用船の儀 その後如何の都合となっておりますでしょうか 先に申し上げました通り 7月下旬出帆ならば最も好都合かと存じますが それより多少遅れても差し支えありません とにかくご都合よろしく便船にてよろしく何卒ご配慮下されたく 尚前に申しました通り 同船には少なくとも一人の助手（理学士）を便乗させたく存じますが また出来れば 3-4名願えますまいか 日食の費用はまだ文部省より指令来ずで 従って民船の金額を旅費として支給されるか見当がつかせませんが 従来の文部省の予算より推算して 誠に貧弱なる事は予想されますので もし出来うべくれば御用船に便乗を願えまいかと存ずる次第であります かような内情を申しまして誠に不恥ずかしい話ですが 貧すれば貪すとお笑い下されたく 今月中に多分例の天文術語委員会が開かれるかと思われるので その節に上京またお目にかかります 先は 6月4日 松隈健彦」

天文術語委員会は天文学術語委員会[10]のこと、海軍御用船・便船は軍用船、民船は民間船のことだと思われます。7月下旬出帆予定のところ、頼みにしていた軍船の許諾の連絡が来ない。貧すれば貪すの言葉に、松隈の焦りの色が見えます。

6.3 1941年6月12日松隈から秋吉へ

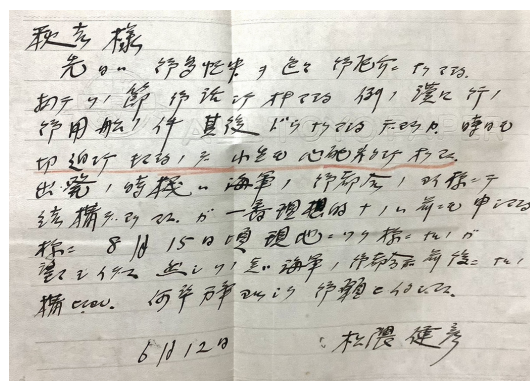


図9 松隈の1941年6月12日の手紙[3]

「秋吉様 先日は御多忙中を色々御厄介になりました さてその節御話しておりました例の漢口行きの御用船の件 その後どうなりましたでしょうか 時日も切迫してきましたので 小生も心配致しております 出発の時期は 海軍の御都合のよい様にて結構であります 一番理想的なのは 前にも申しました様に 8月15日頃現地に着く様になるのが望ましいです ただしその点は海軍の御都合により 前後になるのも構いません 何卒万事宜しく御願いたします
6月12日 松隈健彦」

6.4 1941年6月18日秋吉から松隈へ

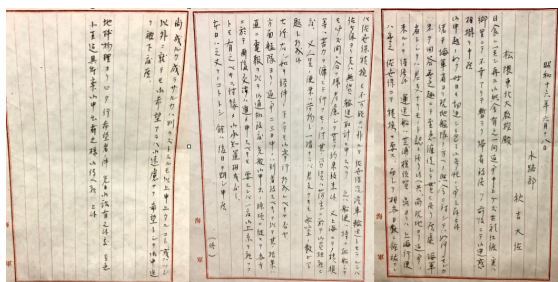


図10 秋吉の1941年6月18日の返信[3]

松隈の6月4日と12日の手紙を受け取った秋吉は、返信(図10)を送りました。

「昭和16年6月18日 水路部 秋吉大佐
松隈東北大学教授殿

日食に関し 再三御照会有之一向申し上げず失礼仕り候 実は郷里にて不幸ありてしばらく帰省いたしてあり その前後にて御迷惑相掛り申し候 御申し越し如く期日も切迫し色々御多忙の事と存じ候

偕(さ)て 海軍省より現地艦隊の方への照会に対してはいかにせんかまだ回答無きの趣にて 至急催促してもらい居りたるどころ 海軍省としては差し支えなきものと認めおり候へ共 尚現地より返事の来るのを待ち居り候 運送船は芝浦 横須賀 呉よりは上海行便は無き之 佐世保にて積み替えを要す 而して相当日数に余裕あれば 佐世保積み換え

も不可能には非るも 佐世保まで汽車輸送とせらるれば 佐世保より先は無賃輸送取り計らいと申すべく 之は船便は特に配船しても必ず間に合う様考えてもらう約束仕り候 又上海にての積み換え等は苦力を備て行うものに付き その労賃は荷主に於いて負担願いたしたく 又人員の便乗は荷物と一緒にならば差し支えなきも 船室の数が問題と相成り候 大体右の如き条件の下にても御挙行相成るべきや否や

方面艦隊よりの返事 2,3日中には到着致すべきを以て その結果は直に電報を以て御通知致し度 先般御申し出の条項に従いて当方に於いて爾後交渉は進め申すべきも 要すれば一度御上京を願うことも有り之のべきに付 あらかじめ御承知置き相成り度し

本日はこれだけのこととし 餘は後日を期し申し候 (終)

尚成るか成らざるかは判らずとするも 以上申し上げたること 或いはそれ以外に就いても 御希望あらば御遠慮なく 希望として御申し送り下され度く候

地球物理より ロタ行き希望者の件 先日御話これあり候 至急小生迄 具体案御申出これあるよう 御伝え願ひ上げ候」

秋吉は不幸があり、松隈の手紙への対応が遅れたようです。また、水路部にも艦船使用の許可連絡は、上層部からまだ届いていなかったことが分かります。

6.5 1941年6月19日松隈から秋吉へ

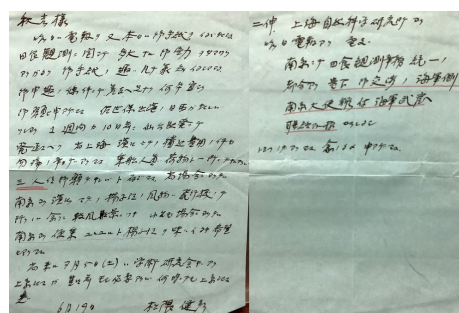


図11 松隈の1941年6月19日の手紙[3]

「秋吉様 昨日は電報を 又本日はお手紙をいただきました 日食観測に関して多大なる援助を賜りありがたく お手紙の趣は全て承知いたしました 御申趣の条件にて差し支えなく 何卒宜しくお願い申し上げます 佐世保出港の日取りが決まれば それより1週間か10日前に仙台駅発にて発送すべく 尚上海漢口にての積み込み費用の件は勿論の事であります 乗船人員は荷物と一緒にできるならば3人ぐらいお願いできればと存じます 尚場合によりては 南京より漢口までの揚子江の風物は 飛行機にて行くのは余りに殺風景につき 小生も場合によりては南京より便乗ゆるゆると揚子江を味わいたき希望であります 尚来る7月5日（土）は学術会議あり上京しますが その前もし必要あれば何時にてても上京します 先は6月19日 松隈健彦

二申 上海自然科学研究所より昨日電報あり 電文は『南京にて日食観測事務統一の都合あり 貴下御交渉の海軍側より南京大使館付海軍武官へ連絡あるようせられたし』というのであります 念のため申し上げます」

6.6 1941年6月22日松隈から秋吉へ

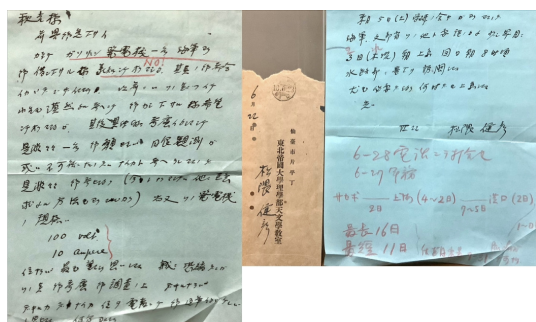


図12 松隈の1941年6月22日の手紙[3]

「秋吉様 前略御免ください かねてガソリン発電機一式海軍よりお貸しくださる様お願いしておりました（赤字でNo!） その点のご都合いかがでございましょう 以前にはその点に付いて小生も漠然たる考えにて お貸しくださる様希望しておりましたが その後

具体的に考慮いたしまして 是非是非一台お願いします 日食観測が或いは不可能になるのではないかと考えられますので 是非是非お願いしたく（借りれなくなれば他に求むる方法ありませんから） 尚またその発電機の規格は100V 10A位ならば最も望ましく思います 誠に恐縮ですがその点御考慮御調査の上 できるならば できるかできないかを電報にて御返事いただければと思います なにぶんよろしく 来月5日（土）学研の会議がありますので 海軍 文部省 その他と要議のため少し早目に32日（本水曜）朝上京 同日朝8時頃水路部に貴下を訪問します 尤も必要でしたら何時でも上京します 先は6月22日 松隈健彦」

秋吉の赤字での書き込みは以下の通りです。

「・6月28日に電話にて打ち合わせ

・6月27日軍務

・佐世保-2日-上海（4-2日）-7-5日-漢口（2日）-1-0日-Paichow

・最長16日最短11日 佐を1日に出發 7-31にて可なり」

Paichowは蕪州、佐は佐世保のことです。

6.7 1941年7月9日松隈から秋吉へ

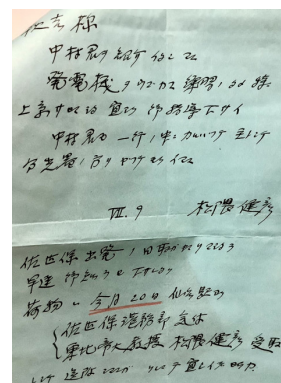


図13 松隈の1941年7月9日の手紙[3]

「秋吉様 中村君を紹介いたします 発電機を動かす練習のため特に上京さしました 宜

しく御指導下さい 中村君は一行の中に加
わってしまして 分光器の方をやってもらい
ます 7月9日 松隈健彦

佐世保出発の日取りが決まりましたら 早
速お知らせ下されたく 荷物は今月(7月)
20日仙台駅より佐世保港務部気付 東北帝
大教授 松隈健彦受取として送付しますがそ
れにて宜しいでしょうか」

6.8 1941年7月13日松隈から秋吉へ

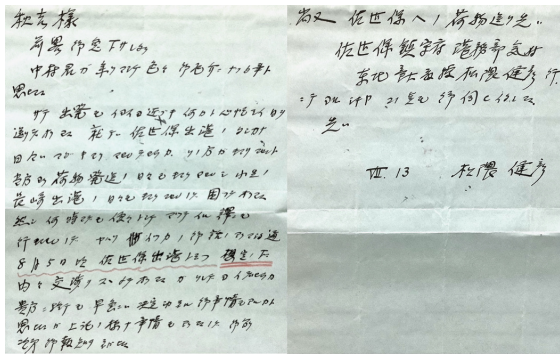


図14 松隈の1941年7月13日の手紙[3]

「秋吉様 前略ご免下されたく 中村君が来
たりまして色々ご厄介になったことと思いま
す さて出発もいよいよ近づき何かと心配し
て日を送っております 就いては佐世保出港
の確かな日にちはまだ決まりませぬでしょう
か その方が決まりませぬと当方より荷物発
送の日にも決まりませぬ 小生の長崎出港
の日にも決まりませぬので困っております
ただし何時までもとして待っている訳にも行
きませぬので やはりいつかのお話のありま
した通り 8月5日頃佐世保出港として想定
した内内交渉を進めておりますが それで良
いでしょうか 貴方においても早急には決定
しかねるご事情もあるかと思ひますが 上記
のような事情もありますので 決まり次第御
報知を願ひます 尚又 佐世保への荷物送り
先は 佐世保鎮守府港務部気付 東北帝大教
授 松隈健彦行にてよろしいか この点をお
伺ひいたしました 先は7月13日松隈健彦」

松隈の心配の種は尽きなかったようです。

6.9 1941年7月14日秋吉の電報

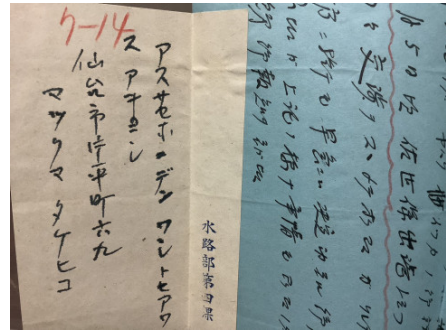


図15 秋吉の7月14日の電報の下書き[3]
これは図14の手紙の下に貼られていた。

「アス(明日) サセホニ(佐世保に) デ
ンワシ(電話し) トイアワス(問い合わせ)
アキヨシ(秋吉) 仙台市片平町69 マツクマ
(松隈) タケヒコ(健彦) 7月14日」

6.10 1941年7月16日松隈から秋吉へ

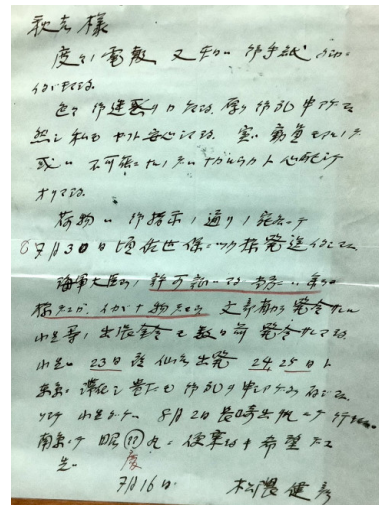


図16 松隈の1941年7月16日の手紙[3]

「秋吉様 度々の電報 また本日はお手紙確
かにいただきました 色々ご迷惑をかけまし
た ただし私もやっと安心しました 実は動
員もあるので 或いは不可能になるのではな
いかと心配しておりました 荷物はご指示の
通りの宛名にて 7月30日頃佐世保に着く
よう発送いたします 海軍大臣よりの許可証
はまだ当方には来てない様ですが いかがな

ものでしょう 文部省から発令される小生等の出張命令も 数日前発令されました 小生は 23日頃仙台出発24,25日と東京に滞在し 貴下にも御礼を申し上げたく存じます そして小生だけは 8月2日長崎出帆にて昭慶丸に便乗したき希望です 先は 7月16日松隈健彦」

出発2週間前になって、ようやく皆既日食遠征計画の見通しが立ち、松隈はやっと安堵したようです。

7. 東北帝大中村弘陸の手紙

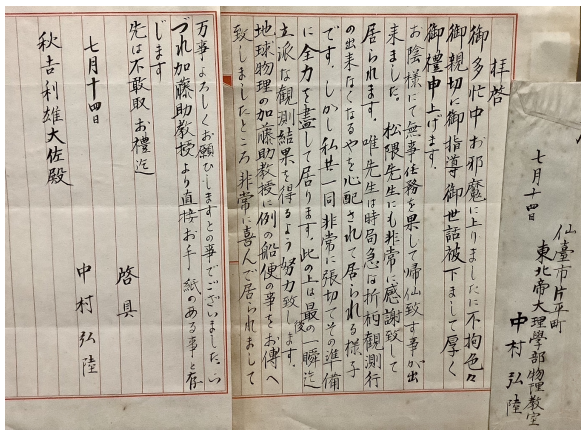


図 17 中村弘陸助手の手紙（7月14日）[3]

「拝啓 御多忙中お邪魔に上りましたに拘わらず 色々御親切に御指導御世話下さりまして 厚く御礼申し上げます お蔭様にて無事任務を果たして帰仙致す事が出来ました 松隈先生にも非常に感謝致して居られます 唯先生は時局急な折柄 観測行の出来なくなるやを心配されて居られる様子です しかし私共一同 非常に張り切ってその準備に全力を盡して居ります 此の上は最後の一瞬迄 立派な観測結果を得るよう努力致します 地球物理の加藤助教授に例の船便の事をお伝え致しましたところ 非常に喜んで居られまして 万事宜しくお願いいたしますとの事でございます いずれ加藤助教授より直接お手紙のある事と存じます 先ずは取り敢えずお礼迄 敬

具 7月14日 中村弘陸 秋吉利雄大佐殿」

8. 松隈についての新聞記事



図 18 松隈についての9月9日の新聞記事

松隈について書かれた、当時の新聞記事(図18) [11]です。一部を引用します。

「(前略) ここに本拠を定めたのについては 美しい師弟愛が秘められている 班長松隈教授は かつて海軍兵学校の数学の教官であり 今大佐級の人々は 全部教授の弟子にあたるので 海軍では非常にこの観測班のために力を入れ 簗州なら何から何までお世話できるからとのことで 一行は観測機械から寝台 畳はもちろん 冷蔵庫まで一切海軍の手で運んでもらい 特に警備兵として一行に加わった飯田三曹 吉武一機の両勇士が万端の世話をやき 食料や水も3日ごとに海軍から届けられている (中略) 観測班のメンバーは 松隈教授をはじめ いずれも5年前北海道における観測の経験者で 皆自信たっぷり 21日午後1時16分から19分までの皆既の時を

待ち構えている」



図 19 東北帝大日食観測隊を警護する兵士 [11]

9. 松隈から秋吉への礼状

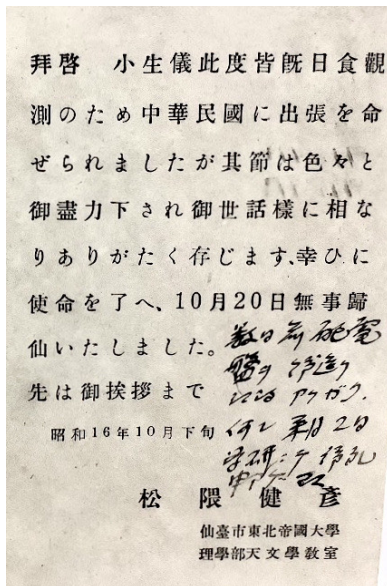


図 20 松隈の礼状 [3]

日食観測から1カ月後、秋吉のもとに届いた松隈からの礼状(図20)です。形式的な印刷文に手書きの文字が添えられていました。

「数日前 配電盤をお送りしました ありがとうございます (た) く 何れ (いずれ) 来月2日 学研にて御礼申し上げます」

無事に皆既日食観測を終えた松隈の満足感が伝わってくるようです。

10. 松隈への追悼文

1950年3月、松隈が死去した際に、東北

大学一柳壽一(1910-1998)(図21)は、松隈に対する追悼文を「天文月報」[12]に寄せました。



図 21 東北大学 一柳 壽一教授 [13]

『『仙台での先生(松隈健彦教授)』(前文略)旅行もお好きで旅行をすると大いに健康を感じるとあって気軽に出かけられた。私の知る限りでも満州、華北、華中、台湾、琉球、それから日食で漢口上流の籓州までも行かれた。この日食行は私も一緒だった。観測の方は薄曇りでよくなかったが揚子江の船旅とひと月余りの中国の田舎町での生活は共に愉快的思い出となった。なにか長い夏の休暇を済ました思いで帰って来ると間もなく戦争が始まった。(後文略)』

11. おわりに

海軍との親密な関係を最大限に活用した松隈。その結果、東北帝大が他の研究機関と比べて、過剰ともいえる厚遇を受けることができたこと。私はこの研究で、戦時に於ける一天文学者の在り方を垣間見ることができました。

ところで、東北帝大は、1945年7月の空襲で理学部物理学教室と天文学講座の研究室を失いました。松隈は、消火活動もされずに燃え盛る大学の姿を見て、激怒したと伝えられています[14]。また、水路部は終戦と共に大混乱に陥りました。水路部井の頭分室では、

暦計算原稿や補助表、浄書原稿、計算機までもが火中に投げ込まれました[15]。しかし、秋吉は、水路部第2分室長（水路部1・2部長兼務）として、水路部笠岡分室の貴重な資料の保全に努めました。

今回公開した資料は、秋吉が個人的に保存したもののうちの一部です。私は、それらの資料にふれるたび、その重要さに心が震え、公開することの大切さを強く感じています。

8. 謝辞

秋吉利雄氏保存資料の数々をご提供くださり、資料の解説等についてもご協力いただいた、お孫様の飛田麗子様に心より感謝を申し上げます。また、歴史に埋もれようとしていた資料を後世に残された、秋吉利雄海軍少将に心より敬意を表します。

文 献

- [1] 中村鏡とクック 25 cm 望遠鏡
<https://double-cluster2018.amebaownd.com>
- [2] ローソップ島皆既日食(3)
<https://double-cluster2018.amebaownd.com/posts/35967019?categoryIds=6358456>
- [3] 秋吉利雄氏保存資料
- [4] 中山茂ら（1983）「天文学人名辞典」, 恒星社, 243 : 356.
- [5] 池澤夏樹（2023）「また会う日まで」, 朝日新聞出版
- [6] 国立公文書館アジア歴史資料センター
<https://www.jacar.go.jp/glossary/term3/0010-0080-0110-0160.html> (2024/08/03 アクセス)
- [7] 日本アマチュア天文史編纂会（1987）「日本アマチュア天文史」, 恒星社厚生閣, 78 : 399.
- [8] 日本天文学会百年史編纂委員会（2008）, 「日本の天文学の百年」, 恒星社厚生閣, 39 : 341.

- [9] 国立公文書館
<https://www.digital.archives.go.jp/item/2423942> (2024/08/12 アクセス)
- [10] 嘉数次人「会誌から見たアマチュア天文同好会の活動」, 大阪市立科学館
https://shiminkagaku-pj.org/wp-content/uploads/2023/02/221118_0204_Kaji.pdf (2024/08/26 アクセス)
- [11] 大阪毎日新聞（1941/9/9）, 「お世話は一切海軍で」, 大阪毎日新聞社
- [12] 天文月報第43巻第3号（1950.3）, 日本天文学会
- [13] 日本天文学会百年史編纂委員会（2008）, 「日本の天文学の百年」, 恒星社厚生閣, 42 : 341.
- [14] 日本天文学会百年史編纂委員会（2008）, 「日本の天文学の百年」, 恒星社厚生閣, 41 : 341.
- [15] 神野正美（2012）, 「聖マーガレット礼拝堂に祈りが途絶えた日」, 潮書房光人社, 97:262.

付記：本投稿では、「支那」「中支」という名称をそのまま使っています。歴史的資料ということでそのまま使用いたしました。また、地名についても当時使用された通りに表記しています。



吉田 陽一